

書 評

中野亜里. 『ベトナムの人権—多元的民主化の可能性』 福村出版, 2009 年, 466 p.

伊藤正子*

ベトナムがドイモイと呼ばれる刷新政策を本格的に開始してから 23 年が過ぎた。その間国際社会に復帰し、市場経済の導入によりめざましい経済発展を遂げ、もはや ASEAN の中でも後発グループではなくなりつつある。また 2008 年末からの世界不況の中でも依然としてプラスの経済成長を維持している。本書は、このように経済的豊かさをもたらしたドイモイ改革の明るい現状ばかりが喧伝されてきたことに疑問をもち、影の部分、ベトナムの人権問題に真正面から切り込んだ勇氣ある一冊である。

本書の目的は三つある。一つは共産党体制下における人権関連の諸問題を通じてベトナムの現代史を見直し、ベトナム革命とは何であったかを問い直すこと。二つ目は、経済発展の一方で目に見えにくい部分で発生している人権問題を明らかにし、より踏み込んだベトナム理解を促すこと。三つ目は、共産党の一元的な統治に異議申し立てを行なう市民と市民社会の形成に着目し、複数政党による自由選挙を通じた民主主義（多元的民主主義）の可能性を問うことであるとされている (pp. 18-19)。

本書は五章から構成されている。第一章「政治体制と人権問題」では国家制度や法の側面からベトナム共産党の人権概念を論じ、どのような法的根拠や理論をもとに人権抑圧が生まれるのかを論じた。たとえば憲法には「すべての国家権力は人民に属する」と明記されているが、共産党は人民を代表した党であることが前提なので、すべての国家権力は結局共産党に属することになる。そして「ブルジョア民主主義」より高次の「社会主義的民主主義」を直接目指すとされているので、ブルジョア民主主義を実現するための多党制はベトナムには不要ということになる。二節以降では、革命の中で生じた虐殺などの負の歴史や、ベトナム戦争終結後に南部の社会主義改造を急激に進めた結果生じたさまざまな負の現象、そして行き詰まった社会主義改造とその結果生じたドイモイ路線への転換が描かれる。

第二章から第五章では具体的事例が列挙される。第二章「市民的・政治的自由の制限」では、国家に対して物申す人たちの活動を紹介し、かれらにさまざまな圧力が加えられ、ジャーナリズムに厳しい規制が設けられている状況を明らかにする。第三章「宗教活動の規制と宗教者への弾圧」では、宗教管理政策の建前と実態を報告している。第四章「社会的公平を求める人々」では、経済発展のひずみといえる問題、つまり土地収用された住民の抗議行動、労働者の独立労組結成の動き、中部高原の少数民族の抗議行動などを取り上げている。第五章「多党制による民主化の要求」では、民主化をめざす市民の活動とそれ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

への国家側の強権的対応を明らかにしている。

そして現在のベトナムの政治体制を特徴づけるものとして、①政治イデオロギーを軸に民族が南北に分断され、②両者間で長期にわたる戦争が続き、③北が南を武力で制圧し、④北をモデルに南の社会主義改造が強行された、という歴史的要素があり、本書が取り上げた人権に関する諸問題にも、そのような歴史的背景が作用しているとする。つまり、旧南ベトナムにつながる者への強い警戒、社会主義体制の「敵」や在外の「反動勢力」への非寛容性など、冷戦の影をひきずった統治体制が、今なお民族和解を受けつけず、結果としてさまざまな人権侵害をひき起こしていると結論づけている (p. 425)。

本書の意義は、著者のいうとおり「日本では研究対象になることが少なかった非共産主義者や、在外ベトナム人による資料を取り上げ、可能な限り共産党政府側のそれと対照させ (中略)、人権問題をめぐる本音と建前の構造を明らかに (p. 19)」したことであろう。国家の公的言説が絶対であり、それ以外が文章になりにくいベトナムの現状の下、ベトナム内外の多様なベトナム人の声を伝えたことは大きな貢献である。

著者は「はじめに」で繰り返し表明している日本人のベトナム認識に対する違和感の原因を、「独り歩きする『神話』」(p. 14)に求めている。『神話』とは、アメリカと戦って勝利したベトナム国家に対し、戦争後 35 年がたとうとする今なお過度な幻想をもち、聖人君子のようにもち上げ、批判を許さない

といった風潮のことであろう。アメリカがしかけた戦争がベトナムに消しがたい傷を依然残しているのはもちろん確かなことだが、一方で現政府の失政が原因である現象まですべてベトナム戦争に原因を求め、ベトナム人を一方的に「かわいそうな人々」として扱うような態度や言説が、日本では特にベトナム反戦運動に参加した「団塊」の世代に根強い。ベトナムに対する特殊な思い入れをもつ人たちが、「権力は腐敗する」という普遍的な命題を頑として受けつけず、絶大な権力を有する国家の一つに過ぎない現代のベトナムを、国家権力から一般民衆まで丸ごと神格化して、みる目を曇らせていると評者も考えている。つまり、そのような日本のベトナム戦争世代の「郷愁」のために、ベトナム国家が犯している重大な人権侵害が見過ごされていると考えている点では、評者は本書と観点を同じくする。

しかしながら、評者のベトナム戦争観は筆者のそれと同じではない。つまり、先に述べた本書の目的のうち、第二、第三についてはほぼ異論はないが、評者が違和感を抱いたのは、第一の「ベトナム革命とは何であったか」という問いについてである。誤解を恐れず簡略化すれば、ベトナム革命は「民族独立」闘争であったか、ただのイデオロギー闘争であったのかという古くて新しい基本的認識の部分である。著者の観点は後者であり、それは先の現在のベトナムの政治体制を特徴づける歴史的要素①から④の中に、アメリカが介入したためにベトナム戦争が始まったという視点が全く示されていないことからわ

かる。

ベトナムの戦ってきた長い戦争がフランスの植民地支配と、植民地なき帝国であるアメリカの横暴な支配に対する抵抗戦争であった、という基本的な認識が、現政府の強権政治を批判するあまり、著者のベトナム戦争観からいつの間にか抜け落ちてしまっている。評者も、革命の過程でベトミンにも過った行為があったことや、現国家のあり方が社会主義の理想から大きく乖離し抑圧的になっていることをもちろん否定しないが、それをもってベトナムの反植民地戦争、民族独立戦争の歴史的正当性が失われるものでもやはりないと考える。著者の捉え方には、ベトナム戦争がどのような世界情勢の中で行なわれたのか、植民地支配に抵抗して独立を求めた人々の最後の熱い戦いであったという人類史における位置づけへの視点が欠けているといわざるを得ない。

韓国の朴正熙政権下で二人の兄が国家保安法容疑で逮捕されその救援活動と韓国民主化運動に携わった徐京植は、同じ中野の著作[中野 2005]を評して、以下のように述べている。

「(同書は…評者注) 新しい世代の研究者たちが抗米戦争終結と南北統一後におけるベトナムを論じた論集であり、現在のベトナムが抱える諸問題について学ぶところが少なくないが、筆者の一人(中野執筆分…評者注)による次の記述は、強い疑問を覚えた。『ベトナム革命に共感を寄せる日本人は、ベトナム人の上にアメリカ帝国主義の犠牲者の姿を見出そうとする。しかし、戦時中と戦後の混乱

期の犠牲者の76%は、ベトナム人どうしの殺し合いによるものだという数字もある[Bui Tin 2003]。外国軍による残虐行為に正当化の余地はない。しかし、ベトナム人が同じ民族の多様な思想・心情を排除し、単一のイデオロギーで強権支配を行ったことは、外国の敵の侵略よりも大きな民族的悲劇と言えるのではないだろうか(p. 57)』。この筆者は、はたして植民地支配というもののシンプルな本質を理解しているだろうか? 帝国主義はいつでも、解放勢力との闘争を『おなじ民族どうしの殺し合い』という形式で遂行しようとするものだ。ベトナム戦争こそ、その好例である」[徐 2006: 89]。

本書において評者が疑問を覚えたのは以下のくだけであり、その疑問は上記の徐の指摘と同質のものである。「わが国では、ベトナムについて『民族解放』と『社会主義』という『神話』ができ上がっている。つまり、正義の民族解放勢力が悪のアメリカ帝国主義に勝利し、アメリカとその傀儡政権から南部を解放し、民族を統一して社会主義国家を建設した、という非常にわかり易い勸善懲悪のストーリーである。しかし、そのわかり易さのために、ベトナムに内在する深刻な諸問題が看過されてきた(あるいは無視されてきた)といえるだろう(p. 14)。」「一つの民族が分裂して敵対し、一方が他方を強権的に支配したことから発生した人権侵害は、外国軍の攻撃より根の深い悲劇ではないだろうか(p. 425)。」

「ベトナムに内在する深刻な諸問題が看過されてきた」ことについては、まさにそのと

おりである。そのことについて、「責任はベトナムを研究する学者にもあるといわねばなるまい (p. 14.)」とする著者の指摘は耳が痛い。しかし、現在ベトナムが深刻な諸問題を抱えていること、あるいはベトナム統一後に現政権の南に対する強権支配があったことを理由に、植民地支配・帝国主義に対するベトナムの戦い自体の正当性を否定し、「一つの民族が分裂して敵対し」たとして、ベトナム戦争を南北の内戦に矮小化することは、帝国主義的本質の変わらないアメリカの戦争の論理に追随することに他ならない。イラク戦争に言及するまでもないが、アメリカが「意に反する政府を倒すことを辞さない点では、紛れもない帝国としての相貌もそなえている」[藤原 2002: 24] ことを看過し、『アメリカ』という自由の空間を外部に広げることは、内政干渉どころか自由の拡大であり、無謀な権力行使ではなく使命の実現だ」[藤原 2002: 30] という介入の論理を追認することにつながるだろう。

このように、ベトナム戦争の位置づけが著者と評者とは大きく異なる点はあるが、現在のベトナムの人権をめぐるさまざまな問題を、正面から取り上げた本書の大胆な試みは評価されるべきものとする。昨今はやりの「地元の人々に貢献する研究をめざす」という一見耳に優しい言説は、「地元」が何をさすかを操作することによって、容易に権力にすりよった御用学者の研究にもなり得るが、著者はこのような言説に距離をおき、国家権力の過ちをはっきりと指摘している。

日本で昨年政権交替が起こるまで、ベトナム

は研究者以外にもさまざまな代表団を日本に送って、自由選挙が実施されているにもかかわらず自民党がずっと安定政権を維持している理由や背景を探っていたという。つまり、ベトナム共産党も将来的には、完全な自由選挙を導入しなければならない時が来ることを予測し、そのために自分たちの生き残りを模索しているといえる。いい換えれば、全国民からみれば少数者である党员たち(共産党员になるためには厳しい審査がある)から構成されるベトナム共産党は、既得権益を守るため、自身の権力維持に固執しているということでもある。

一方、国内のベトナム人の多くは、政治はお上がやるものとして距離をおき、経済的豊かさの方を追いかけている。思想信条信仰の自由、表現の自由などを制限され、苦しみを感じて生きている人々は政治的には少数派にとどまり、民主運動家はまだ力を得るにいたっていない。つまり政治面での改革はすぐさま進展する状況にはない。しかし今年 2010 年はベトナム民主共和国が南部を解放してから 35 年目の節目の年である。日本の自民党などから学ぼうというような貧弱な発想によらず、著者がタイトルとしている「多元的民主化」へ向けて、ベトナム国家自らが政治面における「緩やかで漸進的な改革 (p. 430)」を少しずつ始めるべき時期を迎えているのはやはり確かであろう。(文中敬称略)

引用文献

藤原帰一. 2002. 『デモクラシーの帝国』岩波書店.

- 中野亜里編. 2005. 『ベトナム戦争の「戦後」』め
こん.
徐 京植. 2006. 「道徳性をめぐる闘争—ホー・
チ・ミンと『革命的単純さ』」『季刊前夜第1
期』6: 81-89.
Bui Tin. 2003. Nhung suy tu va uoc nguyen dau
nam ve to quoc, *Hiep Hoi* so3. (評者未見)

河合香吏編. 『集団—人類社会の進化』
京都大学学術出版会, 2009年, 364 p.

水谷雅彦*

本書は、東京外国語大学アジア・アフリカ
言語文化研究所における共同研究「人類社会
の進化史的基盤研究(1)」の成果報告であ
り、2005年から2008年にかけて延べ21回
にわたって開催された研究会が元になってい
る。序論と終章の間に4部構成、計13本の
論文と数本の短論によって成っている本書の
特質は、なによりそのタイトルに表れてい
る。「集団」という、一見身も蓋もない単純
なタイトルは、編者のなみならない自負の表
現であると思われるのである。人間の集団に
関する学問的研究は、社会学や人類学の誕
生以前からも、長い歴史をもっている。し
かし、たとえばその表題に、ただ単に「社
会」とか「共同体」とだけ記された書物がプ
ラトンやアリストテレス以降存在したであ
ろうか。それらの語を部分として含んだタイ
トルをもつものは、名著と呼ばれる古典的書
物を含めて数多くあり、現在もまた大量に生産

され続けている。しかし、それらが、ヒトが
「集まる」という単純な事実を起点として論
じているかどうかには疑いが残る。たしかに
アリストテレスは、ヒトや動物が集まるとい
う単純な現象に注目することからポリスとい
う共同体に関する考察を開始した。ただ、そ
れ以降の「理論」の多くは、その抽象度の洗
練さの度合いに応じて、このおそろしく単純
な事実から語り始めることが次第に少なく
なっていったように思われる。編者の河合香
吏は、本書の執筆陣の誰も「コミュニティ」
という語を使用していないということを半ば
誇らしげに記している。「いきなり抽象的な
社会なるものについて語るのではなく、その
構成要素であり、基底の実在である集団から
出発する。集団なる現象の具体性に賭けるの
だ。」という「序章」における河合の宣言は、
まさに本書全体に通じる通奏低音となっている。

では、そのような「集団」論は、どのよう
な視点によって遂行されるのだろうか。河合
によれば、これまでの社会学や社会・文化人
類学におけるコミュニティ論との最大の差異
は、「進化史的時間軸」というものを考慮す
るか否かにあるという。この進化史的スケ
ールでの長期の視点ということは、河合の研
究歴を考えれば当然のことであろう。それは伊
谷純一郎という霊長類学の世界的権威の下で
学んだ河合(そして本書の論文執筆者の過半
数を占める、伊谷と後継者である西田利貞の
門下生)にとっては、欠かすことのできない
基本的な態度であった。しかし、ヒト以外の
野生霊長類を研究対象とする通称「サル屋」

* 京都大学大学院文学研究科